

著作・出版漫筆

赤堀 又次郎

明治十八年の一月の初に神田へ本を買ひに行き、立派な新式の店へはいつて見ると、厚い板の大きなテーブルが中央に置いてあつたが、本は少くて買はずに出たことがあつた。夫れが東洋館で、富山房の前身であつた。

友人の山口濤太郎君の話で其店の創業以來の事を聞き、又他の友人には「國憲汎論」を精讀してゐるものがあつて、毎度其講義を拜聽して大いに益を得た。其年に國會開設の準備として行政改革が行はれた。官報が發行せられたのも其頃であつた。送り假名の標準を定めて發表したのは官報局が最初であつた。

「明治政史」

指原安三氏著。富山房發行の本を自分が買った最初であつたらう。十二三歳の元氣のよい小店員が、駒込の自分の宿まで持つて來てくれた。指原氏は同じく元氣がよく、共立學校に

勤めて居られた頃、生徒が蛇を捕つて、隣の女學校へ投げ込んだ。そこで女學校から交渉に使者が来る。指原氏が應對に出て一蹴する。使に平身低頭させて歸らせたのは名高い話。外交官にしたらさぞ妙だつたらう。

「國文學」「國文學讀本」

「國文學」は上田萬年氏著。目黒書店發行。「國文學讀本」は芳賀矢一君、立花銃三郎氏同著、上田萬年氏校閲。富山房發行。其頃三上參次氏、高津敏三郎氏同著にて、落合直文、補助として、金港堂から發行せられたものもあつた。三書共に其各の出世作で、めでたし／＼であるが、出る迄の苦心努力は容易なことではなかつた。

發行は共に二十三年で、上田氏は二十一年卒業にて、其時は文科の英語の講師。芳賀立花二氏は共に未だ學生にて二十四年卒業。三上高津二氏は共に二十二年卒業。三上氏も文科の講師で、國學院の世話をして居られた。高津氏は高等學校の教授、文部省の檢定掛。二十三年の暮に文科の助教授となられた。其時に高等學校に他に競争者があつたが、芳賀君が學生ながら推薦して、高津氏を助教授にせられた。其當時では之れは秘密な事。

上田氏は其年に文部省から獨逸に留學を命ぜられた。

「國文學讀本」が芳賀氏と上田氏とを結びつける強いかすがひとなつた。二氏と富山房とを

も結びつけた。

「小學修身經」

指原氏は「明治政史」を終つて後に、托せられて「小學修身經」の編輯に従事せられた。併し仕事が豫期の如くには進展しなかつた。そこで二十四年に芳賀君が卒業後、其事に與られ、長らくかんづめとでも云ふべき状態にて努力せられて出來た。之が大あたりに當つて、東洋館以來の清算が始めて出來たとは芳賀君の話。其頃は國定教科書は無く、書店が自由に出版を許されて居た時代であつた。

「日韓古史斷」大日本地名辭書

「日韓古史斷」は吉田東伍氏の出世作。前島密氏の紹介にて出版したものの由。

吉田氏が讀賣新聞の記者として函館から上京せられたのは、何年であつたか知らぬ。落後生の名にて國史の事を連載せられてゐた。其間に此書も成つたのであらう。

種村宗八と云ふ人が富山房の店員にあつた。後に早稲田の出版部に移つた。之はもと浦和の師範學校に居て、自分の親戚の植松謹藏と云ふが其處に教師をして居て、特別念入りに育て上げたもので、長く植松へも親しくして居り、自分の家にも親しくして居た。「地名辭書」の著作、出版の骨折の事は、夫れから屢々聞いて、大いに感服したことであつた。其人も先年亡くな

つた。

著作出版の四拍子五拍子

話するだけでも容易ではない。話を筆記すれば、即ち著作となる。著作は更にむづかしい。世に三拍子揃ふと云ふ事があるが、著作出版を營業とするには四拍子、或は五拍子揃はねばならぬ。

先づ第一に著作。第二に印刷、製本。第三に經營。第四が讀者。其外に時期が最も大切である。尤も著作にも種々ある。知己を千載の後に待つなど云ふ大見識のものは、營利業の目的にはならぬ。

今日にては、五十年前よりも國運が盛になり、文化が進展してきた。夫れが結晶して著作出版となる。

出版組合の總目錄を見ると、次第に量に於て、質に於て發達してきた道筋が見える。眞にめでたし。同じく資本主義の下にあつて經營せられてゐても、出版は特殊のもの。工業や、農業や、漁業とは大に趣が異なる。どう異なるかと云ふと一寸説明しかねる。

今では米國から日本へ留學生が來る時代となつた。日本の著作出版ものが海外に進み出ることも盛ならむとするまでに至つたのである。